

国際化時代に生きる

飯島 茂

一——はじめに

われわれの隣国に、つぎのような物語りが伝えられている。

昔、ある所に、猿と魚が住んでいた。両者ともたいへんに仲が良かったそうだ。かれらは暇があると川の浅瀬で楽しそうに遊んでいて、その仲は他の動物たちが羨むほどであったという。ところが、ある時その地方に大雨が降り、魚の住んでいる川が洪水に見舞われた。突然の増水だったので、猿は川辺に生えている樹木に一目散によじ登り、九死に一生を得た。そして、足の下で石を噛む濁流を見て、一瞬息をのんだ。いましがたまで、一緒に遊んでいた親友

の魚が激流に翻弄されながら、四苦八苦しているではないか。親切な猿は、わが身の危険をものかえりみず、木をすべり降り、魚を救ってやったのである。だが、その猿の善意は裏目に出てしまった。濁流から「救い出されたはず」の魚は、猿に感謝するどころか、間もなく苦しうにあえぎながら、息たえてしまったのである。

話としてはこれまでであり、内容的にはきわめて簡単な物語りだ。だが、われわれが国際化時代に生き、異文化と接触する際には、きわめて含蓄のある、示唆に富んだ話といえよう。猿の魚に対する善意のように、ある民族の善意というものは、なかなかそのままでは、他民族に通用しないことが多い。そののみか、その善意

が、時には相手を傷つけるどころか、相手の命取りにもなりかねないのである。

わたくしはこれまで仕事の関係で、アジア諸国、また欧米各地で、いろいろと異文化と接触する機会を持ち、また、何回もカルチャー・ショックの洗礼を受け、なんと数多くの失敗を重ねてきたことであろうか！ 従って、わたくしは、読者の方々に高い席から、国際化時代に生きる“HOW TO”を説く立場にはまったくない。しかしながら、職種の関係で、日本人の平均よりは、多少外国生活も長く、異文化との接触が多面にわたることが少なくなかった。そこで、この間、どんな経験をし、失敗を重ね、さらに、どんな教訓が与えられたのか、具体的に

- 一——はじめに
- 二——異文化接触の困難さ
- 三——外国語の壁、異文化の壁
- 四——ユーモアのすすめ
- 五——抑揚のない国際交流を
- 六——異文化を越えて

顧みることにしよう。その上で、異文化との接触が年々密接にならざるをえない。国際化時代に生きる「読者の皆さんにいくらかでも役に立つ示唆があり、また、最終的には、どういうことが不可欠であるかをご理解いただく一助になればと思うのである。

二——異文化接触の困難さ

十年ひと昔というところ、かれこれ三昔も前のことである。当時は、ヒマラヤがまだ秘境と呼ばれていた頃、わたくしはある探検隊の一員として、ネパール・ヒマラヤのチベット系住民の村落調査に従事していた。海拔三、五〇〇メートルから四、〇〇〇メートルほどのネパール西北の高原にある寒村の生活はきわめて厳しい。通常、一人前の人間が生活していくのでさえ、やっとのことであった。そこに、双子が生まれたのだ。これは育てる母親にとっても、また育てられる双子にとっても容易なことではなかった。母乳しか与えていないので、双子の発育にも良くないだけでなく、母親の産後の体力回復もあまり思わしくなかった。しばらく様子を見守っていたが、母子の健康状態は悪化の一途をたどっていた。われわれもついに傍観するわけにはいかなくなり、ある日、両親に、双子に

ヤギの乳を与えることをすすめた。よく知られているように、ヤギの乳は牛乳よりも、母乳の成分に近いからである。

すると、どうしたことだろう。父親は烈火のごとく激怒し、口からつばを飛ばしながら、われわれをなじるではないか。やせ細った母親までもが、よわよわしい声ではあったがそれに加わる。やがて、近くに住む連中までもが、われわれをぐるりと取り巻き、口々に罵るではないか。あまりの騒ぎにわが隊のシェルパが跳んできて、一触即発の険悪な雰囲気割つてはいつてくれた。

シェルパの取りなしでようやく騒ぎが鎮まると、サダー(シェルパ頭)は、村人がなぜわれわれの言葉に激昂したのかを、丁寧に説明してくれた。それによると、「日本の旦那たちは、貧しいチベット人を馬鹿にし、人間扱いをせず、子供にヤギのような動物の乳を飲ませるといつて侮辱した……」というのだそうだ。あまりの「誤解」にわれわれの仲間も、あいた口がふさがらなかつた。その場は、われわれが村人の見ている前でヤギの乳を飲んでみせることで、一応けりがついたのである。

そこで、われわれは、どうしてこんなことになったのかを考えたのであるが、やはり、この失敗の最大原因は、ヤギの乳と、それから作ら

れたバターやチーズを同列に考えたところにあったと思う。バターやチーズを日常の食用として愛好するチベット系牧民は、当然、その原料のヤギの乳を飲むと考えたことが誤りの初めであつたようだ。ヤギの乳は、ヤギの仔が飲むだけで、人間が口にするのには、加工して、バターやチーズにしなければならなかつたのである。わたくしたちは、この単純ではあるが、深刻な失敗に初めて異文化接触の困難さを思い知らされたのである。

三——外国語の壁、異文化の壁

これまで述べたような「未開」ともいえる異文化との接触の例はいささか極端な例かもしれない。しかしながら、他「文明」という異文化との接触になればなるだけ、外国語の壁はさらに厚くなり、高くもなるようだ。

しかも、日本人には、一般に、外国語を苦手とする者が多いことは、よく指摘を受けるところである。だが、われわれはけつして現状に甘んじているわけではなく、このハンディキャップを克服するために、多額の費用とエネルギーを費やしてきたといえよう。近年になると、たしかに、わたくしたちが外国語を習得し始めた頃に比べて、先生方の能力も教授法やししなど

の設備も格段の進歩を遂げ、それなりの成果もあがっているように思う。

だが、こと英語に限って言えば、支払われたコストやエネルギーに比べて、その成果は満足すべきものといえるだろうか。それというのも、わたくしたちは外国語を学ぶ際に、「いったい何のために学ぶのか？」という点について、十分に考えたことがあるだろうか。この点についてわたくしの反省としては、手段の目的化というものがあつたかもしれない。これはあたかも、われわれの先輩たちが漢文を学んだ時の態度と大同小異である。『教養としての外国語』を身につけていけば、いずれは『重厚な外国語』がマスターできるのではないかと期待していたのかもしれない。これがそうならなかつたことは、自分自身の実感として、痛いほど分つているつもりである。

わたくしの場合、外国語習得について、いばん欠けていたのは、どんな目的で、どのレベルの外国語を、どれだけ短期に、かつ経済的に習得するかという中・長期的戦略であつた。いわば、外国語習得に関する『哲学の貧困』であつたといえよう。

たいていの場合、われわれには、外国語をあたかも母国語のようにマスターできるのでないかという幻想がありはしないだろうか。たと

えば、ある英語資格検定試験の準備コースの教材を見聞し、その感を深くしたことがあつた。

それは、テニス・コートのベンチで若い男女がささやき合っている会話であつた。かなりなまりの強い米語であり、早口で短い言葉のやりとりは、たとえアメリカで数年暮した者でも、よほど語学に身を入れて勉強した者以外は、理解するのにかんがりの困難がともなうことだろうと思われる。確かに、外国語を学ぶ場合に、母国語なみにマスターし、こうした込み入つた特殊な会話をも完全に理解したり、そうした会話に入っていくことは理想であろう。しかし、一般の日本人がそれをほんとうに必要とするであろうか。それ以外に、もっと基本的なことを身につける必要がありはしないだろうか。

結論だけ言うと、われわれにとって、一にも二にも重要なことは、外国語としての格調ある英語を身につけることではなからうか。一部の天才、才人を除けば、わたくしどもは *native speaker* 並みの外国語を身につけるなど幻想をいだいてはいけなひではないだろうか。国のサイズも小さく、国民の同質性もきわめて高い今日の日本においては、人々は原則的に『一言語、一文化』の中で育まれていると考えてよからう。こうした者にとっては、外国語を習得したり、異文化に対して相対主義的な考え

方をとるといふことは、きわめて困難である。従つて、たとえば、多民族社会に育つた人にとつて、新しい外国語を学ぶのが『進化』(evolution)であるとしたら、われわれ日本人の場合には、『革命』(revolution)にもたとえられよう。そのためには、従来の考え方の全面的変更が余儀なくされるのである。

こうしたことは、外国生活中に子供たちがその言葉を身につけてゆく過程でよくみられ、いろいろと教えられることがある。一例を挙げると、わたくしたち大人は会話の中で、もしも *rectangle* (矩形) という単語を忘れているとすると、それにこだわり、思い出そうと四苦八苦した結果、口ごもり、ついには口を閉ざしてしまいがちである。ところが、子供の場合は、それを *not round one* (丸くはないもの) と言ひ替へることによつて、完全に正確とは言われないまでも、スムーズにその場をしのいでしまうのである。これというのも、子供たちは、日本文化の洗礼を受けることに十分ではないために異文化接触に弾力性が残されているからである。

ところで、異文化接触をする場合、外国語がある程度マスターしたからといって、それだけでは十分でないのが始末が悪い。私も文化人類学の勉強をしている身にもかかわらず、相手の

文化や社会の相違を無視していたために、何回も失敗を重ねてきた経験がある。たとえば、その中の最傑作は、アメリカの大学で勉強していた時のことであろう。

クラスメートの女学生が、ある日、さりげなく、「Do you have a family?」と尋ねるではないか。わたくしは言下に「family」を「家族」と訳し、横浜にいる両親や妹のことを思い浮かべながら、「Yes, I do. They live in Yokohama.」と答えたのである。するとどうだろう。それまで、いつも、コーヒー・デートにさそってくれたり、レポートの英語をよく直してくれていた彼女は、わたくしの前に姿を現わさなくなりました。わたくしは、いささか狐につままれた思いであった。

が、やがて、レポートで日本社会とアメリカ社会の比較論を書いていると、あの時、とんでもない誤訳をしていたことに気がつき、いささか口びるを噛む思いであった。わたくしにとつて、「family」は親兄弟を含む、日本語の「家族」であったのだが、彼女にとっては、アメリカ流の「核家族」であり「本人の配偶者と、未婚の子供たち」を意味していたのである。従って、彼女の「Do you have a family?」という質問は、「結婚なさっているの?」という質問をすこし、婉曲に言ったただけだったのである。

これに対して、「Yes, I do.」と答えたのでは、身も蓋もないというものである。噫々!

四——ユーモアのすすめ

こうした異民族との間の文化的障壁を克服するのに、きわめて有効な武器として考えられるのは、ユーモアのセンスであろう。

われわれ日本人は、同質性のきわめて高い社会に住んでいるために、おたがいの交流の中では、多言を必要としない場合が多い。たとえば、日本人同志のコミュニケーションの理想は、与謝野晶子の歌ではないが、「心にも歌にもなさじわが思いその日その時胸より胸へ」なのである。とりわけ、日本人の夫婦の会話などになると、外国の人たちには、とうてい理解がでないほど、寡黙であり、簡単であろう。いわんや、こうした文化的背景のもとに育ったわれわれに、異民族との対話にユーモアを持ち込むことなど、容易にできることではない。

だが、異文化が接し、多元的な価値観が日常的に不協和音を出しがちな所であればあるほど、その潤滑油として、ユーモアの果たす役割は大きくなるだろう。

いつだったか、ある会議で、こんなこともあった。首都圏のある自治体で、横浜市で行った

ように、在留外国人を招いて、その自治体の行政や生活について、意見を尋ねる会が開かれた時のことである。

若いフランス美人が、「日本の警察はすこしおせっかい過ぎます。わたくしが夜ジョギングをしていると、不審尋問と称して、住所や職業、それに時にはわたくしが結婚しているかどうかさえ聞くのです」と、顔に似合わない調子で抗議の声をあげる。すると、その自治体の幹部の一人は、大まじめに、「警察の首脳に御意向を十分伝え、今後そうしたことのないよう善処いたします」と答え、いささか座をしらけさせてしまった。そこで、わたくしは、「マドマ—ゼル、あなたが御結婚されているかどうかは、日本の警察官ならずとも、男ならば誰れだって大いに関心があります。わたくしだって例外ではありませんので、この会合が終ったらわたくしにもこっそり教えてください」というとこのパリジェンヌは、いかにもフランス人らしく、おおげさに手を上げ、肩をすぼめてみせていたが、目ではほほえんでくれた。

五——抑揚のない国際交流を

ところで、わたくしたち日本人の異文化接触の歴史を振り返ってみると、いちばん気にかか

ることは、それに対する態度の振幅が著しいことである。

戦前の夜郎自大的な対外姿勢をとった時代のこととは言語道断であるけれども、それが敗戦後になると一転し、卑屈なまでの自虐性に身を委ねるのは、いったいどうしたことなのだろう。これには、わたくし自身も、まったく驚かされた経験が一度ならずあったことを記憶している。

その中の一、二の例を紹介すると、以前、横浜市が外国系の市民の方々を招いて、市政や横浜の生活について、いろいろの意見をうかがったことがあった。横浜市の国際交流については、かねがね関心が深かっただけに、声をかけてもらおうと、二つ返事で司会の役を引き受けさせてもらった。外国系市民の方々には、横浜生まれの方もいれば、近年、日本人の配偶者と一緒に横浜に住みつかれた方も少なくなかった。出席者の方々に知日派や親日派の方が多かったせいか、市政に対しても比較的好意的で、横浜の生活も、それなりにエンジョイされているような印象をもったのである。座談会の後、関係者の方々と、「いま少しコシヨウをきかし、ピリットさせた方が、座談会として面白かったかもしれない」と異口同音につぶやきながら、記者会見に臨んだのである。外国系市民の代表

の方も、わたくしも座談会の雰囲気をかなり忠実に再現し説明したはずであった。だが、翌日のある新聞の見出しには、いささか驚いてしまった。「在住外国人の眼きびしく」というのである。少なくとも、わたくしがこの座談会で受けた印象、そして記者会見で説明したことは、きわめて相違していたのである。

また、バンコクに住んでいた頃目撃したことであるが、日本から来たインテリが日本の過去の非を認め、タイの人たちに詫びたところまではよかったのであるが、かれが現代日本を告発口調で批判し始めたあたりから、座がすっかりしらけてしまったのである。かれが席を立つと、タイ人の友人の一人は、「あの人は、ほんとうにああ思っているのだろうか」といぶかりながら、「ああいうことを真顔でいう君たちはほんとうにこわい……」といたずらっぽく笑うのであった。

こうした他虐趣味と自虐趣味の間を極端に揺れ動くわれわれの線の細い、ひ弱な考え方は、他民族の軽蔑を招くことはあっても、尊敬を集めることは、夢のまた夢ではなからうか。異民族と接し、交際を深める中で重要なことは、超大国の人たちに対しても卑屈になる必要はないし、小国の人たちに対しても姿勢を高くしてはならないということである。抑揚のない、バラ

ンスのとれた常識をもって、あるがものを、あるがままに見ていく精神を培い、それに対処してゆくことこそ重要なものではなからうか。

六——異文化を越えて

国際交流にともなう異文化接触の困難さや問題点について、わたくしのささやかな体験にもとづいて、思いつくままに筆を進めてきた。しかしながら、この短い文章の中では、すべての問題について言及し、所見を述べるわけにはいかなかった。そこで、最後に、国際交流の中で、もっとも重要と思われる人間の質について述べることにしよう。

何年か前に、財団法人横浜市海外交流協会が主催した公開シンポジウム「異文化クロスオーバー」が開かれたことがあった。国際化時代に、横浜市民の、そしてまた日本人の国際交流のあるべき姿を摸索するために、横浜市民を中心に、在日外国人の方々の協力を仰いで、二日間にもわたり熱心な討議が行われた。

その最後のセッションで、イギリス女性の日本画家であるマーガレット・スマイスさんが、国際化時代に生きる日本人に対して、きわめて、適切なアドバイスをしてくれたので紹介しておこう。

スミスさんは、多くの日本人の話す英語の水準、とりわけその発音の悪さが、国際交流における日本人の立場を、必要以上に不利にしていることを指摘し、この面でのいっそうの努力を熱望した上で、知日派らしい、つぎのような好意あふれる助言をもって、発言の締めくくりとした。

「ロンドンのヒースロー国際空港にやって来る外国人旅行者のうちで、わたくしの知る限り、税関で、日本人の旅行者ほど簡単に通関できる人たちはおりません。それは、伝統的に、日本人の多くが正直で、あまり密輸などに手を汚していないからです。

日本の皆さん、日本文化や日本社会の国際化はこれからの日本にとって、たいへんに重要な

課題ですが、どうかその中で、これまで日本人が長い歴史の中で育て、保持してきた正直さ、人間の質の良さというものを、今後もけっして失うことのないようにやっていってください」と強調し、内外の出席者の共感を得たのであった。

今日、ジャーナリズムをにぎわしている国際化論や異文化接近への方法論は、とかく、どちらかというところ、「How to」論的なものが目立っている。そのため、スミスさんが指摘したような人間の質に関する論議が、ままたおざりにされがちである。だが、いま述べたようなスミスさんの発言には、かつては七つの海の支配者であり、異文化接触には、苦勞に苦勞を重ねてきたイギリス人らしさがにじみ出ている味わい深い

いものがあつた。諸民族を隔てている社会や文化の壁を最終的に克服し、乗り越えさせるものがあるとしたら、それは単なる「How to」的な知識や技術ではなく、正直さとか誠実さといった、いわば人間の質の高さなのであろう。さりげないが、スミスさんのこの重厚な言葉には、日本人出席者の多くが深い感銘を受けたのであった。

二十一世紀に向けて、国際化時代に生きなければならぬ日本人、とりわけ、「みなとみらい21」事業の中で、国際文化都市建設を志向しているわれわれ横浜市民は、時として、スミスさんのこの忠告を反芻する必要があるだろう。

△東京外大教授▽